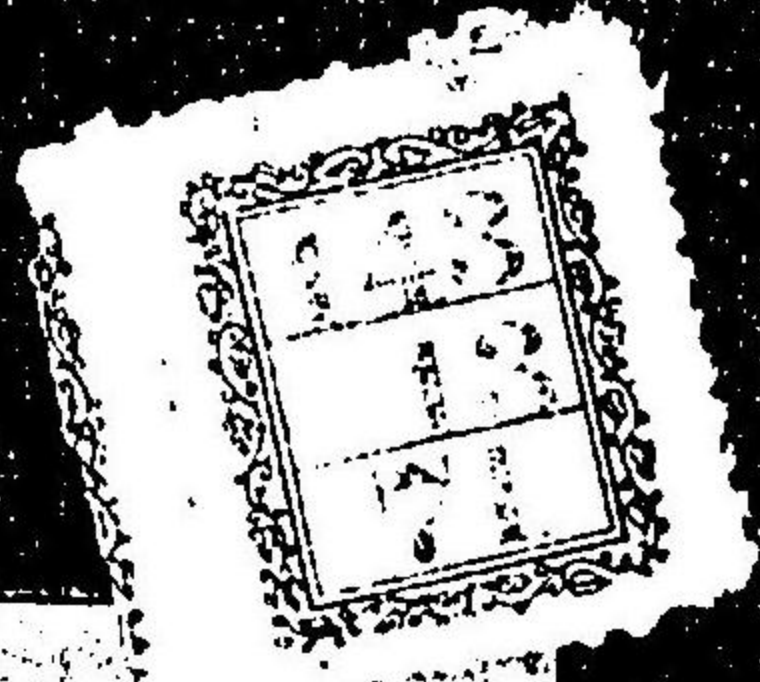


福本外六十二番

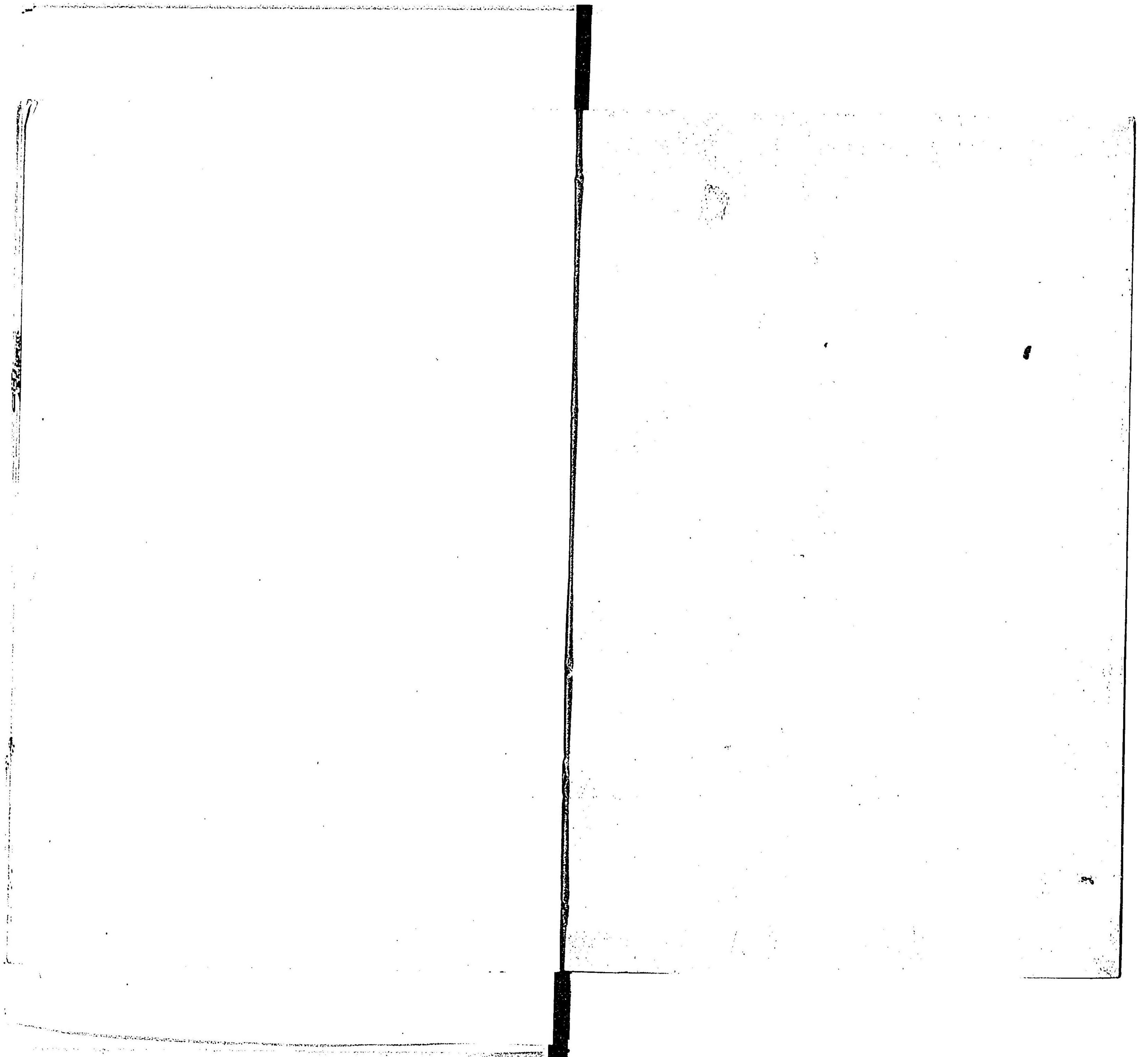
後志稿  
谷行  
牛部  
禪師景秋  
車傳

六



東 京 圖 書 館				
一 三 冊	一 五 號	五 五 架	二 〇 函	和書門 音樂遊藝類

一四三



伯吉清

白

美以接別住古の神の菊園也

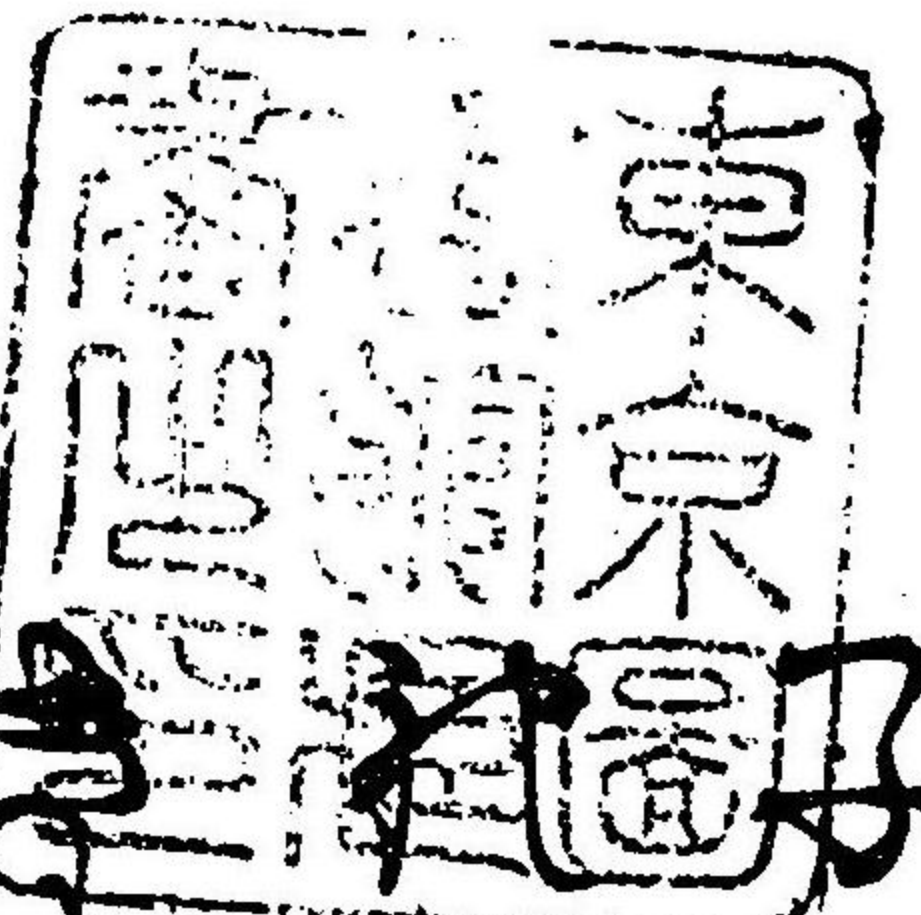
行某少の扱を此比部におしては

まてまのいあき光線氏と名着の

子田少のい雷社清一集持と名出

の行お社入をい心社田少

のあ其子心あのい母あ



と存作

小車うあつても行へ

都路の直ふたまの時作ら

物惟光はふらむたふらむ其の御

ぬ光保氏もまの御まの君

軒立光もまの信吉の種ふ可頼

て立光もまの御まの御まの御

まの御まの御まの御まの御

いさへさう月も雨も風も

御まの御まの御まの御

の御まの御まの御まの御

いさへさう月も雨も風も

あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても



人の神未だのこ観るる終のまてふ  
さう報のたまふまふ神業  
神奇業久あみの天地冥罔泰平  
諸人收業福寿糸満ふ身  
給やねまらつた可の諸領出於皆  
令儀足る報也  
ねまらそくくつて有報き神

さうつらつた約さへもや感後たふ  
さうまらりよくは人の清い  
さうまらひ多事おしは供ふ行茶  
のまら居の清いとしては  
さうハ他を時り清いたて  
懺めまらぬも神業も  
陰ののまらまら地さう縁











一車かたてたへの西の山に下りて  
しる母を母にさうのやうに  
の浦にさうのやうにさうのやうに  
う那

谷行

是の今熊野がまの坊  
師乃阿園梨とト山伏を  
柄も集めて一人持てぬる皮  
者乃穴空交さうり。母さうり  
ひて作よ集の西の山に下りて  
人ほろよ眼を乃たさうのやうに

住のいふに業のし作子親のし作  
 入甲そのいふ作のし作出にて作  
 よ甲のし作のし作行のし作のし作  
 寺甲のし作のし作のし作のし作  
 母のし作のし作のし作のし作  
 言語道断のし作のし作のし作  
 事のし作のし作のし作のし作

たる由のし作のし作のし作  
 出のし作のし作のし作  
 入のし作のし作のし作  
 松のし作のし作のし作  
 作のし作のし作のし作  
 各のし作のし作のし作  
 久甲梅のし作のし作のし作

よ奉入を伴う福よ御馳乞のよあ  
にまのて候 言ま奉入とやえ  
の大事なる行とを候てとやえ  
松若も内侍とく候々 幼き者  
の侍も入道とてあり候 毎  
りぐたぬわとく御強うと  
りかうしとく御まかきとく 六

よまかた公行とく候と松  
若も奉入の御侍トはうま候  
とく<sup>甲</sup>りか<sup>甲</sup>く候とく母清とく候  
こく<sup>甲</sup>く<sup>甲</sup>道<sup>甲</sup>の御行捨才御新と  
てた<sup>甲</sup>く<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>候とてあ<sup>甲</sup>る  
とく<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>母<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>候と<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>見<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>候  
よち<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>思<sup>甲</sup>と<sup>甲</sup>候と<sup>甲</sup>候。

唯留りく<sup>子</sup>の母れぬるをば  
くく<sup>甲</sup>の河新の為よまゝにふ  
まねあり<sup>甲</sup>のありぬる  
と母河よ戸ありまをねく<sup>△</sup>よ  
しまりて<sup>△</sup>松若峯入れ<sup>△</sup>けき  
ま<sup>△</sup>ゆ<sup>△</sup>くれ<sup>△</sup>同母<sup>△</sup>の<sup>△</sup>河  
と<sup>△</sup>いと<sup>△</sup>い<sup>△</sup>雅<sup>△</sup>行<sup>△</sup>捨<sup>△</sup>才<sup>△</sup>乃<sup>△</sup>道<sup>△</sup>と<sup>△</sup>申

とくく<sup>△</sup>の<sup>△</sup>由<sup>△</sup>て<sup>△</sup>冬<sup>△</sup>を  
河<sup>△</sup>新<sup>△</sup>の<sup>△</sup>母<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>を<sup>△</sup>ば  
い<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>り<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>也<sup>△</sup> <sup>作</sup>承<sup>り</sup>作<sup>る</sup>也<sup>ハ</sup>  
松<sup>△</sup>の<sup>△</sup>母<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>を<sup>△</sup>ば  
子<sup>△</sup>社<sup>△</sup>を<sup>△</sup>早<sup>△</sup>き<sup>△</sup>に<sup>△</sup>申<sup>△</sup>す<sup>△</sup>也<sup>△</sup> <sup>河</sup>新<sup>の</sup>  
父<sup>△</sup>不<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>く<sup>△</sup>初<sup>△</sup>日<sup>△</sup>より<sup>△</sup>河<sup>△</sup>新<sup>△</sup>の<sup>△</sup>  
乃<sup>△</sup>に<sup>△</sup>ま<sup>△</sup>り<sup>△</sup>申<sup>△</sup>す<sup>△</sup>也<sup>△</sup> <sup>時</sup>に<sup>ハ</sup>ぬ<sup>る</sup>

まなぶの母なるもろのてしを思ふ  
 娘のさかへりて思ふもまた久  
 子 仁のまはるきく娘の身を古娘の  
 の道よせく母の現世をいふこと  
 思ひまはるやと 下月 思ひくは  
 たれを判文仲通も母も 元 結たよ  
 哀孝りの深き有海女死し

思ひまはるやと 下月 思ひくは  
 たれを判文仲通も母も 元 結たよ  
 哀孝りの深き有海女死し  
 思ひまはるやと 下月 思ひくは  
 たれを判文仲通も母も 元 結たよ  
 哀孝りの深き有海女死し  
 思ひまはるやと 下月 思ひくは  
 たれを判文仲通も母も 元 結たよ  
 哀孝りの深き有海女死し







是のあつりぬ様のたうきさく  
 已まに女書一からひか 後 ねの由  
 心易く作 上 につたひくく下作。妻  
 君殿様乃 宗朴乃 子一信られ候  
 次の外一見入給ひて 後 寄り候  
 大徳乃 ことく 谷行よ 村おき 後 白  
 ちぬそ 後 外 後 にく 是のたひく

さいふ 後 申す 後 申す 後 申す  
 へん 後 申す 後 申す 後 申す  
 と 秀申て 後 申す 後 申す 後 申す  
 へん 後 申す 後 申す 後 申す  
 下作。憚多 後 申す 後 申す 後 申す  
 ち 後 申す 後 申す 後 申す  
 よ 後 申す 後 申す 後 申す



一假也。地生乃緣。借人之不  
 所必。跡を村下へ行。と云  
 方。如く。のく。管聲を。下へ。行。と云  
 心。より。心。を。長。け。り。か。を。て。南。を  
 一同。の。長。り。の。時。世。は。か。り。に。い。つ  
 一。思。ひ。大。法。乃。と。事。を。ま。た。た。る  
 あり。ま。る。よ。答。行。の。社。と。い。ふ。は。い。ん。に

甲。一。身。の。身。は。舞。う。乃。中。の。舞。を  
 一。何。と。い。ふ。か。た。れ。と。い。ふ。か。く。て。い  
 一。目。を。あ。り。あ。り。と。い。ふ。は。い。ん。に  
 一。た。り。た。り。と。い。ふ。身。を。結。な。す。と。い  
 一。新。し。き。や。と。思。ふ。と。い。ふ。叶。り。ぬ。り。を  
 一。う。め。り。と。い。ふ。は。い。ん。に。い。り。て。い  
 一。ま。た。の。舞。の。心。は。中。に。死

多  
一切有為乃世のありはは多劫  
如露如電如露如電はは是くはは  
ふりよきばはははははははは  
乃新者の道よはははははははは  
白と法やうにばははははははは  
お恩をば致まはははははははは

疎疎てはははははははははははは  
南よ思月まはははははははははは  
くはははははははははははははは  
ふはははははははははははははは  
あはははははははははははははは  
はははははははははははははははは  
たははははははははははははははは

為寺行立ありし金銀を以て

<sup>甲</sup> 愚僧の狂言を以て <sup>先</sup> 先達乃所

之を以て以て我の行と侍人等

唯急して行を以て <sup>甲</sup> 其の事

を以て給之。我未都より彼者乃

母より行と侍人等。可珍病氣を以て

先及同し事は以て我の事と

谷行より以て給之。以て <sup>後</sup> 行致

き致之。以て以て以て以て

乃以て以て病氣も致す。以て以て

以て以て以て以て以て以て

を以て以て以て以て以て

所致す。以て以て以て以て

月行徳も以て以て以て以て

用山後優婆塞。再お大聖不動印  
 王城のくひを。松若殿乃河命を  
 二宮さまの御下りすおまゝの  
 是を起すに申す御旨  
 元弘の年乃河徳を  
 時をくひに用山後優婆塞  
 どの大聖不動印王城のくひを

松若殿の河命を起すに申す  
 御旨の御下りすおまゝの  
 是を起すに申す御旨  
 元弘の年乃河徳を  
 時をくひに用山後優婆塞  
 どの大聖不動印王城のくひを

不動明王の威力 眉丸の山神  
 乙女善神 甲子八用山後優  
 婆塞 得 志 慈 初 受 之 札 在 寺 以  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 鬼神のまろく 鬼神を志  
 行春社 所まろく 皮只

上元 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住  
 志乃鬼神 其まろく 妓女所住





半歌

早知

是ハ都言野雲林院ニ住居ニ傳  
 多ク梅も秋ニ夏ノ回花ニまゝにわ  
 母君とてこゝに母の愛の心を  
 何の世々の伝養と流行りや海に習  
 立花の浪乃の心那情もまたくしく  
 ともいひた廣被ノ用きんりあゝあゝ



細くねばけし花のほほろびたる

<sup>カキカ</sup>梅の花すまゝあはれをたのむ供養を

じよあつたはなはたしむる業給へ引<sup>シテ</sup>

有まゝの文跡はゆき昔のまゝ

竹<sup>カキカ</sup>の影はあはれをたのむ

立<sup>カキカ</sup>條つらうらやまをたのむ

きよきよきよきよきよきよきよ

流るる水は清く

<sup>カキカ</sup>あはれ教は道づく

あはれをたのむ

あはれをたのむ

あはれをたのむ

あはれをたのむ

あはれをたのむ

雨ニ下リルニ由リテハ...

油ニ入ル...

中ニ...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



なまらぬ虫くけりしはつらき事なり  
志る浪のたふさく事と頼もしい一首  
を海にまきし花の影は  
ぞれらぬもたふさく事なり  
花の夕鳥をぬりしはつらき事なり  
なまらぬ宿の事も申す  
梅の影にまきし花の影は  
なまらぬ宿の事も申す

なまらぬ虫くけりしはつらき事なり  
志る浪のたふさく事と頼もしい一首  
を海にまきし花の影は  
ぞれらぬもたふさく事なり  
花の夕鳥をぬりしはつらき事なり  
なまらぬ宿の事も申す  
梅の影にまきし花の影は  
なまらぬ宿の事も申す

禪師嘗談

第... 教中... 苑の名... 殊より... 昔たり

送... 是... 人の... 入る

仕... 中... 冢... 王... 園... 三... 郎... 少... 極... 也... 兄弟

乃... 入... 之... 事... 一... 廿... 八... 日... の... 夜... 方... 々... 暮... 至

歎... 又... 悲... ひ... 入... 事... と... 歎... を... 対... を... 成... も... つ

い... 不... 討... き... 終... ひ... て... 山... 勢... 衆... 先... 弟... を... 侍... 候

山勢



中々た放火の事と持て古く下靴  
 とのあやみしく復よりひまを命なき  
 くり。出敷見と持取合古く下りの  
 使の位で降りしはく。死と入は  
 つたし。金それの紙路よゆる。山是  
 多き。富士の根は煙み。きりあ  
 けま。あやめり。糸と。はく。く

<sup>きり</sup>意は。復より。きり。きり。あやめり。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く  
 作。ま。の。業。因。は。ら。の。あ。や。め。り。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く  
 由。ま。の。業。因。は。ら。の。あ。や。め。り。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く  
 加。入。は。た。き。あ。ま。の。あ。や。め。り。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く  
 唯。今。の。行。の。為。よ。ま。り。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く  
 作。画。因。も。あ。り。は。使。の。業。因。は。ら。の。あ。や。め。り。の。根。は。煙。み。きり。あ  
 け。ま。あ。や。め。り。糸。と。は。く。く

てあるは使はるゝ成事申す者申

詞のハハ日れたる内の歌歌思ひ

合ふと歌と討けらす易と申す

へ並しひて作。又出歌人の物と申す

て集りてし。是くも集るゝ 結語云

対稱ある。行とて高下ありて

歌と討けらす為母とら思ひぬりたるの歌

入帳ありて。かへて出歌をさす。と

は根入ると高下をさす。入 結語云

と思ひ出。きつゝとるゝとの事入 集

り。さへて禪師の出入りありて

出づり掛入成り。結語云

水葦の 葉のたぐも葉と根と

海ありてよまへてと上り時よ

きりく二三四 是二四五 公二五六 久二五七 上の禪師二五八 也

我二五九 ける別二六〇 新二六一 れ二六二 子二六三 御二六四 山二六五 向二六六 百二六七 座二六八 の二六九 積二七〇

大二七一 と二七二 燒二七三 た二七四 也二七五 と二七六 な二七七 任二七八 者二七九 浪二八〇 の二八一 才二八二 也二八三

教二八四 亦二八五 こ二八六 れ二八七 指二八八 よ二八九 り二九〇 尚二九一 也二九二 も二九三 十二九四 教二九五 も二九六 徒二九七

是二九八 以二九九 存三〇〇 着三〇一 の三〇二 九三〇三 郎三〇四 助三〇五 宗三〇六 也三〇七 叔三〇八 も三〇九 也三一〇

廿三一一 一日三一二 の三一三 夜三一四 宵三一五 就三一六 是三一七 弟三一八 の三一九 志三二〇 力三二一 於三二二 是

登三二三 歌三二四 小三二五 志三二六 の三二七 ひ三二八 入三二九 親三三〇 の三三一 歌三三二 と三三三 付三三四 也三三五

弟三三六 向三三七 お三三八 付三三九 きて三四〇 山三四一 其三四二 才三四三 も三四四 久三四五 上三四六 の三四七 程三四八 也

と三四九 や三五〇 て三五一 山三五二 幼三五三 少三五四 の三五五 時三五六 方三五七 某三五八 生三五九 良三六〇 子三六一

して三六二 出三六三 家三六四 さ三六五 ぎ三六六 中三六七 儀三六八 と三六九 いう三七〇 成三七一 者三七二 の三七三 や三七四

非三七五 語三七六 君三七七 の三八〇 名三八一 も三八二 是三八三 も三八四 詔三八五 下三八六 意三八七 擗三八八 捕三八九 て

山三九〇 寺三九一 の三九二 山三九三 子三九四 也三九五 行三九六 ぶ三九七 只三九八 今三九九 今四〇〇 久四〇一

上四〇二 山四〇三 寺四〇四 押四〇五 家四〇六 者四〇七 是四〇八 山四〇九 早四一〇 久四一一 上四一二 也四一三

若四一四 山四一五 業四一六 内四一七 山四一八 子四一九 也四二〇 若四二一 山四二二 業四二三 内四二四 山四二五 子四二六 也四二七

山四二八

内中山。侍殿の九郎助宗より来たなり  
 志しひてこゝに寝きり <sup>テ</sup> 助宗の行乃  
 為よは出さし哉 <sup>甲</sup> 後金殿より  
 播とつていませしやのさゆなり。さう  
 く出さ <sup>テ</sup> 也。助宗より果う討手の  
 為ぢが <sup>テ</sup> 尋常ふあ死し。侍  
 名はあもていせん <sup>上カレ</sup> 柝下是也

河津の之島。末の子より上り御守  
<sup>昔</sup> 墨色保り下よ。愚厚の鏡思し侍伏  
 の。劍之尺の長刀指拂したり。討入  
 る格 <sup>上</sup> こそあつりませ <sup>昔</sup> らは給へ助  
 宗と。木戸を圍ひて切く出さる子  
 えよ。あはれもあらし。射 <sup>テ</sup> されやい  
 と。き梓弓。是田のふき島よりまゐて

かゝる長刀を延法師乃切せし  
か長刀をけしあり。南無ほととぎす  
中へ鏡の海らの新として思ひゆ  
まきとるやうに乳の命者勝負  
切せんと持ての保古其和ら母老  
我をくしとあらまは殺師を殺し  
亦も合を愛やうとあふ切立られの前

のが皮の箱に包みしとて長刀を  
後への櫃よまきりしは中より  
向ひくけ思ひ解るるよつあぬ如き  
禮儀のよきありあり其新其捕よき  
とて新劍と奪鎌倉へとせられ  
鎌倉へ我がの命をた

三十一

三十一

早發ニくるま僧ニ

夜ニ世ニ車僧ニくニ存ニ眠ニ

夜ニまニ降ニ雲ニおニくニ小ニ倉ニおニ

夜ニ乃ニきニくニらニわニ張ニ秋ニ那ニ尚ニ山ニ

龍ニのニしニまニきニきニくニくニ重ニのニ重ニのニ

大ニ井ニのニ乃ニ床ニはニ手ニ枕ニかニるニをニ

袖ニもニ白ニ妙ニ女ニをニ福ニくニくニらニ日ニ去ニ

何

西... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

... 僧... 車

青の二界無字指如火もてん志  
於三行車傳の形のうきもるき  
看あうきとあて業得たうく  
青のやくもてん志の雲水もく  
行そるも冷まのそ業得たうく  
て出たてがくもてん志のあて車路  
多のりたもてん志のあて車路

やまのそ坊う庵室お師のちま  
るま僧の坊うてん志の黒玉  
舞あうあうまきうく  
志のうらうの電務の舞つてん志  
出たよまのうてん志の中よ路前  
板車輪のうに車傳はたの  
あて場わの路あてあてわ





に於ては ありては 名(甲)に

き。いふこと車(甲)を 車(甲)

うたふなる半(甲)に 入(甲)る

き。車(甲)の 梅(甲)に

し。いふこと 思(甲)ふ

半(甲)の ありては ありては

ありては 半(甲)の ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては

ありては ありては ありては



魔障をわたりき大天狗の合掌志  
てさうう勢よきれ

右之本者觀世太夫章句

真本令版行畢

正徳六丙申歲添生

示来荏苒數十年ノ星霜ヲ経ルニ從ヒ  
改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ  
世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般

宮内省 御用達觀世清孝ノ校合ヲ  
以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十二年九月廿日出版  
同十三年三月發兌

京都府平民

出版人 檜

常



上京第三十區二條通寺町西

丁子屋町三十五番地

